

「動物園の生物学 2：教育の場としての動物園」 参加報告

浅川満彦（酪農学園大学獣医学部寄生虫学教室（野生動物学））

はじめに

少年少女時代、TVニュースか科学雑誌のグラビアでしか、その偉容に接するができなかった、南極観測船「ふじ」。私と同世代の人々に、特別の思い出を呼び起こすその船の隣に、名古屋港水族館がある。2003年3月16日（日）と17日（月）、そこで、「動物園の生物学 2：教育の場としての動物園」が開催された。この企画は、昨年に引き続くもので、今回も京都大学霊長類研究所の上野吉一氏と友永雅己氏によりオーガナイズされた。が、今回は市民ズーネットワークや名古屋港水族館の方々が運営で全面的に協力し、また企画自体、21世紀COEプログラム（京都大学）としてなされたものであった。参加者も、園館関係者のみならず、関東・九州からの獣医学徒や一般を含む約50名を越え、盛況であった。

プログラム

題目と講演者は以下の通りであった。

(1) 教育の場としての動物園を考える

：上野吉一（京大・霊長研）

(2) 社会への教育システムとしての動物園

「情報装置としての動物園」：渡辺守雄（九州国際大学）

「動物とともに生き、動物を生きる子どもたち：体験としての動物園」：矢野智司（京大）

「動物園における学習支援システム：掲示板、ガイド、学習会」：赤見恵理（市民ズーネットワーク）

「動物観・自然観と動物園の展示」：若生謙二（大阪芸大）

(3) 高等教育システムとしての動物園

「野生との掛け橋としての展示施設における研究」：栗田正徳（名古屋港水族館）

「動物園と行動学」：友永雅己（京大・霊長研）

「野生動物の医学を学ぶ」：浅川満彦（酪農学園大）

(4) 動物園における教育環境の整備

「行政から見た公立動物園の位置付けと未来」：鹿島英佑（東山公園事務局）

「動物園での教育の可能性」：石田おさむ（東京多摩動物園公園）

(5) 総合討論

動物を知る、環境を知る

まず、上野氏による表題の講演が、本シンポジウムの趣旨説明を兼ね実施された。前回は園館管理者、飼育技術者、研究者から、研究の場としての動物園の有用性や研究実施上の問題点が紹介された。これまでの動物園と研究者の相補的な関係は、

欧米と比べ、希薄なものであった。それは園館自体のコンセプトや研究者の持つ園館に対する先入観などが影響してきたことによる。今日、動物園は従来の「娯楽」に加え、「教育」、「研究」、「種保存」としての役割が求められている。が、これらの役割は相互に関りを持つ。前回、園館での研究が展開しにくい理由として、研究者と園館関係者との間に、研究活動に対する意識のずれがあることが見えた。たとえば、研究成果が、園館への還元が十分ではなかった。園館も繁殖技術や臨床獣医学などといった直接役に立つテーマにのみ目が向けられる傾向が強かった。このように、園館動物の研究の意義は、限定的で、一般的には十分に認識されていない状況にある。この原因には、園館が教育施設としての社会への視点が不足していたこともあろう。そこで、園館がさまざまなレベルでの教育を展開する場となることができるかを明らかにし、またそれを実現するための問題などについて検討する必要がある。なお、前回の内容については、本ニュースレターで紹介したので（浅川，2002）、参照されたい。

社会教育のための仕掛け

その教育活動に必要な、園館の具体的な仕掛けとして、情報発信基地としての事例を渡辺氏が、また NGO 参加の事例（市民 ZOO ネットワーク，2003）を赤見氏によりそれぞれ紹介された。動物観・自然観からの動物園の展示法について、環境デザイン学の立場から、現在の海外園館展示と近代の西欧庭園との比較や実際に手がけている天王寺動物園の事例などを若生氏が紹介した（若生，1999，2001）。それぞれ、興味深いものであったが、著者にとって馴染みのなかった矢野氏による教育学からの切り口は新鮮であった。

たとえば、動物園で体験する「ああ・・・」とか「おお・・・」と思わず唸らせる感動は、一瞬のもので、蓄積はされない。一方、システムとしての教育活動とは、大人になるための経験を蓄積させるもので、体系的なモノである。概して、前者は制御が効かないが、刺激的ではある。しかし、後者は枚挙的で退屈であるものの、コントロールし易いので学校教育は、専ら、こちらに心血が注がれてきた。あれほど感動させた音楽も、学科目の「音楽」は面白くないのはこのためであるという。

しかし、知識を深めることにより、感動も新たにする側面もある。動物園での教育では、新たな側面から動物の観察をさせ、生涯に残るような感動を創出する仕組みを期待するとのこと。傷病鳥獣に接し「ああ痛ましい！」と心を痛めた獣医学徒が、「野生動物医学教育で、救護活動の問題点を教わった途端、色褪せた」などと言われぬよう、注意したいものである。

高等教育の実践と教育環境の整備としての動物園の改善

大学以上の高等教育としては、研究との関連性が強くなる。栗田氏はご専門のペンギンを例に、繁殖や摂食などの生理および mtDNA や核 DNA の遺伝子管理などについて、東海大学や

極地研などとの共同研究の結果を消化しつつ、この側面を具体的に講演した。研究遂行上必要不可欠な3点、上司の理解、飼育職員の理解および明確な研究目的と意義の理解に配慮しつつ、最終的には、進化モデルの検証に結びつけるべきという主張は、明記すべきである。

この主張は、友永氏による動物園動物を用いたの行動学の展望でも共通していた部分もある。行動学の守備範囲には、古典的な記述・自然誌的なものから、認知・生態学的なものまで含まれるが、どのようなデータも生理（至近要因）や進化（究極要因）に迫るものでなければならない。このためには、サンプルサイズや大きな実験場が必要になるが、その点、動物園は飼育している種の多様性と標準化した制御可能な環境が備わり、特に血縁選択や互恵性の研究フィールドとして理想的である。ただし、最近の研究動向では園館の飼育動物を用いた研究は少ない。これは、今なお、飼育動物はabnormalであるという偏見があるのではと分析している。大学教育としては、観察実習や卒業論文などで積極的に利用できるとする考えに、いわゆる「片づけ論文」や「収奪論文」（就職活動などに時間を取られ、単に単位や学位を取るためにバタバタ行う研究のこと）の放置は社会的犯罪であるというフロアからの意見は、謙虚に耳を傾けるべきである。

著者は野生動物医学会の作成した「野生動物医学教育」のシラバスを紹介し、特に、園館における動物園動物医学の講義・実習計画について、専門医制度や学会コースについて、理事会議事録に準じ紹介した。具体的な事例として、英国 The Royal Veterinary College とロンドン動物園で共同運営される野生動物医学コースの実習風景を紹介したが、それに対し、園館動物の飼育技術に関連した専門職大学院構想はあるようだとの情報をフロアから得た。野生動物医学の同様な試みに弾みがつくもので、大変喜ばしい。

鹿島氏から全国園館の現状紹介がなされ、公立動物園の未来は楽観視できないものの、最近の日本動物園水族館協会の総会で、環境省と文部省の高官の参加があったということで、明るい兆しもあるという。石田氏からは、動物園の社会的機能を戦前戦後からパンダ到着までの歴史を絡め、解説された。総合教育における協力や教師への教育、国語の教科書の動物出現数の調査など、石田氏の実践された興味深い体験は、聴衆をひきつけた。

おわりに

総合討論では、日本人の感性にあった動物園における教育とその仕掛けをテーマに、白熱した論議が展開された。以上、簡単ではあるが、シンポジウムの中味を紹介したが、上野氏によると、前回と今回の講演者には、講演内容に関する原稿が依頼され、一冊の本になるという。総合討論の要約やその後の文献的資料も補強されると思うので、詳細はその本に譲ることにし

よう。素晴らしい企画をされた上野・友永両氏はじめ、冒頭紹介した方々に深謝する。なお、個人的ではあるが、本シンポジウムの運営に追われつつも、名古屋港水族館の施設をご案内下さった同水族館獣医師・加納義彦氏にも感謝したい。

参考文献

1. 浅川満彦. 2002. シンポジウム「動物園の生物学：動物園動物を研究対象にするためには」に参加して. *Zoo and Wildlife News* (日本野生動物医学会). (14):9-11.
2. 市民ZOOネットワーク. 2003. ワークショップ「じっくり見学ツアーシア - お客さんの視点, キーパーさんの視点」テキスト&資料集. 市民ZOO ネットワーク, 東京都文京区関口, pp.38. (詳細は <http://www.zoo-net.org>)
3. 若生謙二. 1999. 動物園における生態的展示とランドスケープ・イメージネーションの概念について. *日本展示学会誌『展示学』*. (27): 2-9.
4. 若生謙二. 2001. 天王寺動物園サバンナゾーンとランドスケープ・イメージネーション. *大阪芸術大学紀要『芸術』*. 24: 38-46.